

## 摂津国風土記散歩 18

## 住吉宮町古墳群(続々)

## 馬・牛に関連する遺跡

寺岡 洋



## 東大阪市域(続)

住吉宮町古墳群(神戸市東灘区) 32次調査の1号墳から馬歯と下顎骨が出土したことから、馬・牛に関する遺跡を紹介している。

前回、東大阪市域で住吉宮町古墳群と立地や墳丘が類似する植附(うえつけ)古墳群、段の上古墳群を紹介した。平地に立地し、墳丘も小型低方墳に周溝を巡らし、周溝から馬の上腕骨や馬歯が出土している。遺物は、韓式系(かんしきけい)土器や鉄滓(てっさい)など典型的な渡来系集団と関連する。

東大阪市域は古墳の多い地域であるが、とりわけ山畑古墳群(上四条町・瓢箪山町)が有名である。市教委が刊行する『東大阪市の古墳』(2001)には、「……騎馬を飼育していた馬飼部(うまかいべ)をひきいる、百済系の渡来氏族=河内首(かわちのおびと)一族の築いた古墳群」とあり、簡単に紹介する。

近鉄奈良線の瓢箪山駅で下り、稲荷神社が祭られている瓢箪山古墳(山畑52号墳)へ。この古墳の墳丘は日本では珍しく、慶州でよくみる双円墳(そうえんふん)である。東大阪市域はこの双円墳が4基も集中しており、新羅系の有力な集団の集住地でもあっただろう。

ここから20分ばかり生駒山の麓まで歩くと東大阪市立郷土博物館がある。周辺に70基あまりの古墳が確認されており、10数基見学できる。なかでも2号墳は上円下方墳という特異な墳形に、全長16.6mという長大な横穴式石室が開口している。これは墳形・石室規模とも大王陵クラスといえる。

継体紀二四年(530)条には、河内母樹(かわちのおものきの)馬飼首御狩(うまかいのおびとみかり)という、河内馬飼部の首長と見られる人物が加耶で外交折衝にあっている。

この河内の母樹(神武紀には、母木)は東大阪市の豊浦町(枚岡駅周辺)に比定されている。余談だが、これにより8世紀初、「母」を「おも」と読んでいたことがわかる。

馬飼集団が行った祭祀かどうか不明だが、渡来系集団の祭祀とも関連し注目されている「導水施設を設けてカミまつりがなされたとみられる遺跡」として、神並(こうなみ)・西ノ辻遺跡も注目される。大和葛城の南郷大東遺跡よりさらに大規模である(図録『カミよる水のまつり』橿原考古学研究所 2003)。

瓢箪山駅と枚岡駅の間になる河内町には、百済系の河内連(川内直)が創建したとされる河内寺(こんでら)跡が残る。河内連(むらじ)は河内郡の大領(だいるょう 郡司のトップ)に名前が残り、河内の地名を冠する氏族として大きな勢力を持ったのであろう。また、この地は大宅(おおやけ)郷に比定され、河内郡の郡衙(ぐんが)が存在したと考えられている(『東大阪市の寺跡』東大阪市教委 2000)。

植附古墳群については詳細な内容が紹介されている(福永信雄「生駒山西麓における小型低方墳群の一形態」『西谷真治先生古稀記念論文集』1995)。

## 河内馬飼 列伝

河内の馬飼でもっとも有名な人物は河内馬飼首荒籠(あらこ)であろう。継体大王の即位(507年)に際し、重要な役割を果たしている。具体的な関係は不明だが、騎兵集団を掌握し軍事的な貢献が大きかったのでは、と推測されている。継体大王の下では、同族であろう河内(母樹)馬飼首御狩が外交使臣のメンバーとして活動している。

天武天皇のころ、河内の馬飼集団は官人(律

令貴族)に变身したようである。天武十二年(683)、河内馬飼造(みやつこ)、娑羅々(さら)馬飼造、菟野(うの)馬飼造は、それぞれ連(むらじ)の姓(かばね)を賜姓された。

娑羅々馬飼連は、『姓氏録・河内諸蕃』に佐良々(さら)連とあり、「出自 百濟国人」とある。『靈異記』に記される更荒(さら)郡馬廿(うまかい)里に居住したのであろうか。

菟野馬飼連は、欽明紀二三年条(562)に登場する、更荒郡(更野邑(うののさと)の新羅人と関連するのだろう。『姓氏録』に、「宇努(うの)連 新羅皇子金庭興の後也」とある。

持統天皇はこの馬飼氏に養育されたのか、<sup>野</sup>野讚良(娑羅々)皇女とよばれた。

#### 馬飼の里 四条畷・寝屋川・枚方・大東

日本列島で本格的な馬の飼育が始まったのは、5世紀中～後半ころからとされる。河内の牧の想定地域では先の東大阪市域も含め、牧の開始とともに新たに集落・古墳・祭祀場などが形成されたことが、発掘により確認されている(図録『古墳時代の馬との出会い』榎原考古学研究所 2003 『歴史シンポジウムわが国最古の牧』寝屋川市教委 1998)。

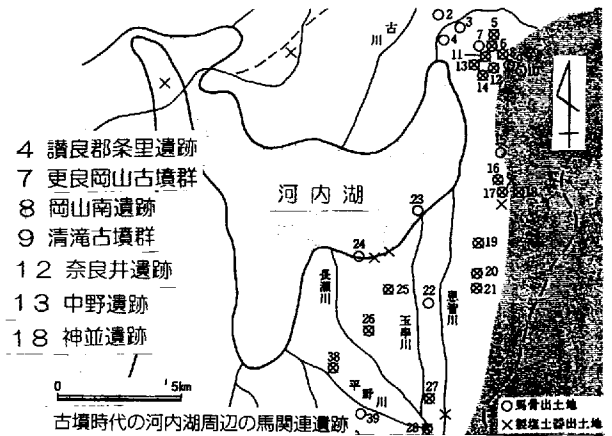
北河内の牧は、河内湖の東岸から生駒山西麓にかけて営まれており、とりわけ四条畷市域に集中する(注:河内湖は規模が小さくなるが、江戸時代、大和川の付替えまで残った。枕草子やフロイスの手紙にも登場する)。

JR学研都市線・四条畷駅で下り、線路沿いに10分ばかり北へ歩くと、かつての東高野街道に面して四條畷市立歴史民俗資料館がある。まず、ここで資料と予備知識を。

#### ●奈良井(ならい)遺跡(馬飼の祭場跡)

資料館から北へ清滝街道(国道163号線)をくぐり、市民総合センターの建つあたり。

一辺40mほどの方形の溝に囲まれた祭場で、その周溝から7頭分の馬骨が出土した。1頭を除いて頭部のみで、すべて成馬だった。馬首を切落とし、神に捧げる祭りを想定するイラストが描かれ、よくわかるので広く引用されている。ここでは5世紀後半から6世紀中ごろまで祭祀が継続して行われていた。



また、この集落の東に隣接する古墳群には、清滝2号墳、更良岡山(さらおかやま)1号墳、大上(おおがみ)2号墳でみられるように、周溝の内外に馬の埋葬土壌が確認されており、被葬者の祭祀にあたって馬を殉葬させる特異な習俗があったことがわかる(『みどりの風と古墳』四條畷市立歴史民俗資料館 2002 『奈良田遺跡・奈良井遺跡 発掘調査概要報告書』四條畷市教委 2000)。

ところで、祭祀において馬首を供えるのが中心であったかどうかは不明である。現在も行われるムーダンの祭りに際し、豚の頭を捧げる行為から想像されているきらいがある。

古代中国では祭祀にあたり動物犠牲が重要な役割を果たした。「……皇帝の親裁する祭祀においては、皇帝自らが刀をとって、犠牲獣を殺し、そのあと毛と血とを神前に供えるのがふつうであった。……牛を殺すこと自体、鮮血したたる肉を捧げる行為に儀礼の中心があったのである」(井上光貞『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会 1984)。

これによれば、首長たる馬飼首御狩が、聖なる履物・下駄をはき、自ら刀をとって、馬首を切落す祭りが想像される。ちなみに、岡山南遺跡では日本最古の下駄が出土している。

#### ●中野遺跡・鎌田遺跡・部屋北遺跡

中野遺跡は5世紀中ごろ、馬飼集団が最初に移住してきた集落とされる。大溝から馬の下顎骨と製塩土器が大量に出土した。塩は馬の飼育に必須のもので、厩牧令(きゅうぼくりょう)にも規定がある(野島稔「河内の馬飼」『古代 埋もれた馬文化』馬事文化財団1993)。むろん、四條畷市域では中野遺跡を含め

朝鮮半島系の土器（韓式系土器）も多数出土している（『四條畷小学校内遺跡・中野遺跡』四條畷市教委 2000）。

中野遺跡に隣接する鎌田遺跡（同じムラかもしれない）からは、祭祀の道具が出土している。祭祀具を飾る台とか、スリザサラとよばれる楽器である（スリザサラは、昔よく見た漫才のおばさんが使っていた代物そっくり）。

祭祀具を始め、2頭以上の馬骨などが出土したのは奈良井遺跡と類似する方形周溝遺構と推定される溝内であり、馬に関する祭祀場とされる（村上 始「鎌田遺跡の調査速報」『考古学ジャーナル』470 2001）。

葎屋北（しとみやきた）遺跡は今年の夏、「古墳時代の馬の全身骨格が出土」と比較的大きく報道された。現場は大阪府の大規模な下水処理施設建設によるもので、遺構が重なっている。遺跡の立地は鎌田遺跡よりさらに西よりで、河内湖（近世の深野池）の湖岸である。

注目を集めた馬の埋葬土壌は古墳に伴うものでなく、集落域からみつかった。遺構の面は5世紀後半と推定されている。馬の年齢は5～6歳。体高（前脚の爪先から肩まで）は約125cmで、日本在来馬でいう御崎馬（宮崎県都井岬）・木曾馬の小さいクラス程度の体格になる。在来馬の特徴は、頭部が大きくて足が短く、たてがみや尾の毛が豊かであり、埴輪の馬によく描写されている（「葎屋北遺跡現説資料」大阪府教委 2003. 7. 12）。

### 馬飼集団 馬とともにやってきた人々

日本列島では、5世紀前半の古墳に馬具の副葬が始まり、5世紀中葉以降に河内や信濃で馬の飼育が開始される。

5世紀前後、朝鮮半島では高句麗・百濟・新羅・加耶が争っており、百濟・加耶の支援により馬と馬飼集団が日本列島（倭）へ送り込まれたのではないかと考えられている。

馬は3年に2頭ぐらいしか子を産まないことから、相当の数（？）が渡ってきたとも推測されている。馬の輸送もたいへんであった。埴輪でみるような10人乗り程度の小さな船に、立ったまま眠る馬を乗せて運んだのである。讃良（さら）郡条里遺跡（寝屋川市）では、

スリザサラを持つ巫女



祭祀場の復元（推定）

2隻の準構造船と、準構造船を転用した井戸杵が発掘されている。

馬飼集団の故郷は、日本列島で出土する馬具の特徴・系譜から推定されている。

5世紀後半までの鉄製の轡（くつわ）と鉄板張りの輪鏡（わあぶみ）は、金海・釜山などの金官加耶のものと共通する。5世紀後半以降の、金メッキした飾り金具である杏葉（ぎょうよう）や轡の鏡板（かがみいた）は、大加耶の中心地の高霊と陝川の出土品に類例があり、さらに百濟の馬具にも共通した特徴が見出せる、そうである。このような馬具の故郷は、それを付けていた馬と馬飼集団の故郷に直接つながるとされる（『古墳時代の馬との出会い』）。

### 風納土城（ソウル市 百濟都城跡）

今、韓国でもっとも注目される遺跡のひとつである風納土城から、12頭分の馬首が出土していることを紹介しておきたい。

権五榮教授（ハンシン大学校）が調査を担当された風納土城キョンダン地区は、百濟時代の「国家的次元での祭祀を始め、重要行事を行った空間」と評価されている場所である。

9号遺構からは、12頭分の馬首、2千余点の高級土器、土馬、人形（ひとかた）、鉄製鏡、ガラス玉、梅の実、雲母などが出土し、馬首は祭祀に使われたと推定されている。

また、詳細はわからないが外来系遺物として、日本製土器の出土も挙げられている。「直」と刻まれた磚も、姓と関連しないか気になる（「遺跡発掘調査の成果」ハンシン大学校博物館 2003 権五榮「風納土城キョンダン地区 発掘調査の成果」『風納土城の発掘とその成果』ハンバ大学校 2001）。